2024. 7. 31　電気新聞

ハリスは勝利し得るか

田中　均

たなか・ひとし―69年京大法卒。外務省経済局長、アジア大洋州局長、外務審議官を経て（株）日本総研国際戦略研究所理事長を経て特別顧問、（公財）日本国際交流センターシニア・フェロー。

ウェーブ　時評　wave

目まぐるしい展開だ。6月27日にCNNが主催したバイデンとトランプの討論会から、トランプ暗殺への企て、共和党全国大会におけるトランプの大統領候補および副大統領候補の正式指名、そしてバイデンの大統領選レースからの撤退発表とハリス副大統領の選挙戦への参入。この間、1カ月にも満たない。しかし情勢は大きく変わった。

81歳になるバイデン大統領の高齢不安はかねがね言われていたことであるが、米国で高齢を批判対象とするのは年齢による差別になる。その批判が正当化されるのは、唯一、その職業につく能力が高齢の故に十分でないと認められる時だ。バイデン・トランプの討論会においてバイデンが言葉に詰まり、長い沈黙があり、トランプの攻撃に有効に反論できなかったのは誰しも認めるところだった。そしてトランプに対する銃撃事件が起きた。かすり傷であったのは幸いだったが、その時、トランプが右手を高く掲げ、何度も「ファイト！」を繰り返しながらシークレット・サービスに抱えられ壇上を去った姿は、大統領選挙の帰趨を決めるシーンであると思ったのは、筆者だけではなかったはずだ。現に、その事件以降、支持率は明らかにトランプ有利の趨勢を示した。

ここで勝利を確信したトランプは攻撃的姿勢を多少穏健化させるのではないかと思われたが、実際に共和党全国大会で示されたのは従来通りの過激姿勢であった。副大統領の選択にしても、自己の欠点をカバーするような人選が本来あり得たはずなのに、トランプがSNSで指名したのは39歳と若いがトランプをさらに過激にしたような「MAGA（アメリカを再び偉大に）」論者、J・D・ヴァンス上院議員だった。ヴァンスはラストベルト（錆びた工業地帯）といわれるオハイオ州出身で海兵隊に入りイラクで従軍し、奨学金を得てイエール大学ロースクールに進学。22年の中間選挙で上院議員に当選した「アメリカン・ドリーム」をかなえた白人男性だ。

バイデン大統領が引き続き選挙戦にとどまっていれば、「認知能力が落ちたバイデンがさらに4年大統領職を全うできるか」という多くの人が持つ不安を掻き立て、トランプ陣営は選挙戦を有利に進めることができたはずだ。トランプは嫌いだがバイデンも嫌いだと言う「ダブル・ヘイター」も多い。しかし、バイデンの撤退、ハリスの参入という事態は情勢を根本から変える。59歳のハリスは78歳のトランプに高齢批判の矛先を向けることができる。黒人とインド系のルーツを併せ持ち、検事として人種差別撤廃、人権擁護に戦ってきたハリスは米国の力の一面を代表する人材なのだろう。ハリスは副大統領としての実績に乏しいと言われるが、ハリスはそれまでの経歴でも上司に対して忠誠を持ち、突出することを避けてきたということも言えるのかもしれない。

これから選挙戦は「既成勢力に抗し、アメリカ・ファーストを掲げ、理念より利益を追求する」たくましく強い白人男性と「理念を重んじ社会の平等を追求する」柔和な非白人女性の争いとなる。両者の違いは明らかであり、両者にとっての「岩盤支持層」に加え、どれだけ接戦州で浮動票を獲得できるかによって決まる。ここでカギになるのは2世代と言われる若年層であろうが、筆者は米国史上初めて「女性大統領」が誕生する気がしてならない。